校長の願いを保護者・地域・教職員に伝える学校だよりの冒頭文①
～コロナ禍が突如襲ってきた最初の半年～

西田　拓郎
（名古屋芸術大学　教育学部　子ども学科）
（前・岐阜県大垣市立墨俣小学校長）

１．はじめに

36 年間、公立小中学校の教員を務めた。感動の連続であった。子供のそばで子供の成長に直接かかわることができたからだ。そして、令和３年度末に定年退職を迎えるが、令和４年度になると同時に本学に着任することができた。これもまた幸せな人生だと感謝している。私は教育学部の実務家教員としてぜひとも教育現場で味わった感動をそのまま学生に伝え、学修に生かしてもらおうと思う。

私は７年間校長（小・中学校３年、小学校４年）を務めた。そこでは、開かれた学校づくりの取組として、毎月発行の「学校だより」を大切にしてきた。特に最後の２年間（令和２年度から３年度）は、コロナ禍で学校にかかわる多くの人たちとのコミュニケーションが取りづらい状況にあった。そんな中にあっても、「学校だより」は校長の願いを保護者・地域・教職員に伝えられる重要な位置を占めた。印刷して保護者や教職員に配布するとともに、地域には自治会組織を利用して回覧し、さらには、ホームページ上にアップして誰にでも見ることができるようにしていた（一部非公開）。

本稿では、コロナ禍が突如学校に襲ってきた最初の半年間（令和２年４月から１０月まで）に、私が勤務校（以下、墨俣小学校と記す）で発行した「学校だより」の冒頭文のみを取り上げて当時の様子を振り返ることにする。そして、そこで校長である私が、どんなこだわりをもって、何を書いてきたかを動かぬ教育実践として整理しておくことにする。

さて、冒頭文に着目するのには理由がある。PDCAのサイクルで学校の様子を報告するのが開かれた学校づくりのための「学校だより」の役割だとは認識しているが、それを意識するあまり、無味乾燥で形式的な報告書になってしまっては残念である。実はそのような「学校だより」をたくさん見てきた。どんなによい文章を書いても読んでもらえなければ意味がないし効果も上がらない。「学校だより」を手にした人が、興味・関心をもって読み進めてくれるかどうかは、冒頭文にかかっていると私は思う。まずは、読者に興味関心をもって読み進めてもらえるように、私は冒頭文で学校の方針をトピックとして示したり、児童や学校の様子をエッセイにまとめたりした。それは、読者に親しみやすく伝える工夫であった。

２．学校だよりの冒頭文とその意図

（1）目玉の対策を示す
～令和２年４月号～

校長は学校経営の公約（マニュフェスト）を保護者をはじめ地域や一般の方に示すことは重要なことである。しかし、限られた文章量の「学校だより」にあって、学校の施策や方針を長々と説明しても興味深く読まれることは少ないだろうと常々思っていた。そこで、冒頭文ではいくつかある教育施策や方針のうち目玉となるものを１つだけを示してわかりやすく伝え、その他は別文書にて説明するようにした。

さて、令和２年（２０２０）に入ると全世界で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るった。我が国

においてもその感染拡大を受けて、総理大臣・安倍晋三は、２月２８日、突然、全国すべての小中学校や高校などに３月２日月曜日より春休みに入るまで臨時休校とするよう各都道府県の教育委員会などを通じて要請した。墨俣小学校においても同日から４月７日までの休校を決定した。その間、３月２５日には、卒業生全員、在校生代表１名、保護者１名及び教職員のみの参加で卒業式を行った。教育委員会事務局職員や来賓の参加はなしであった。また、校長による卒業証書授与は代表者のみで記念合唱などのセレモニーもなかった。

４月（令和２年度）に入っても猛威は続き休校は延長となる。４月８日だけは入学式、始業式を行った。そこで配布した「学校だより」の冒頭文が下掲の【①令和２年４月号】である。

特に伝えたかったことは次の３点である。

ⅰ　非常時でも始業式を迎えられた喜び

ⅱ　本校の教育目標

ⅲ　コロナ禍に立ち向かう本校の対策

中でも、ⅲには本校が独自にとった対策が含まれていた。その目玉の対策は、どの教室も２０人程度で授業を行うようにしたことであった。ちなみに当時の学校教育法施行規則では学級定員が 40 人（低学年のみ 35 人）と定められていた。働き方改革の真只中にあって、教員の負担増になるのは間違いなかったが、本校の教職員が全力でコロナ禍に立ち向かっているのだという姿勢を家庭や地域に示すことは大切なことだと考えた。職員も理解を示し、不満の声が上がることはなかった。

【①令和２年４月号】

困難に立ち向かう　～新型コロナウィルス拡散防止対策

校長　西田拓郎

校庭の桜の木がみずみずしい葉桜にかわり、日ごとに、温かさを感じる季節となりました。混乱する世の中ではありますが、本日、令和2年度の始業式を迎えられることをうれしく思います。いよいよ、墨俣小学校の令和2年度が始まります。

墨俣小学校の教育目標は「自分から正しく判断でき、豊かな心で世界へはばたく子　～考える子　助け合う子　鍛える子～」です。そして、校訓は『誠実』です。これを実現できるように、「ふるさとを愛し、ひたむきに取り組む学校づくり」にみんなで努力していきましょう。

学校は何より児童の命を育む場所です。墨俣小学校では新型コロナウィルス拡散防止対策として、4月9日（木）から4月17日（金）まで臨時休校とします。4月20日（月）から再開します。当面（一学期間）は次の方策を打ちます。

【授業】教室での授業は全て 20 人程度の少人数で行います。

教員一人あたりの担当授業数を増やしてこれを実行します。児童のいわゆる「3密」を避けるためです。あわせて、次のとおりの対策も行いますので、ご家庭や地域の方々にもご理解・ご協力をいただきますようお願いいたします。保護者の皆様には別に詳細な対応策の文書を配付します。

～以下、省略～

(2) 葛藤も失敗も書く
～令和２年５月号～

休校期間は２度の延長となった。５月に入っても学校での教育活動を再開することはできなかったのである。当時は、現在のように学校が配布したタブレット端末を全児童がもっているという ICT 環境が整備されていなかった。教員は学習課題を各家庭に配達して電話で生活の様子を確かめるのが精一杯であったのだ。そんな中にあって、墨俣小学校では各家庭にある PC やスマホを活用して、オンライン上にアップした動画を児童が視聴するという授業ができないかを模索していた。その様子を報告した「学校だより」の冒頭文が、下掲の【②令和２年５月号】である。

コロナ禍という誰しもが体験しえなかった状況の中で、保護者や地域と心を１つにして教育活動を展開していくためには、客観的な事実を伝えることのみならず、校長が教職員といっしょに何をどう考え、どう試行錯誤し、どのように手を打ったかを伝える必要があった。そこで私自身の葛藤や失敗も書くようにしたのである。すると、保護者や地域はむしろ好意的に受け止めてくれた。実際、文章中に登場する某アナウンサーに教えられたように、児童が求めていたのは自分の学校の先生の生の声であった。これまで、私は学習材（教材）とは、学習内容が的確にかつ魅力的に伝えられるものがよいと考えていた。しかし、どうもそれだけではなかったようである。学校の子供たちは、自分の先生が自分にどう語ってくれるかについても強く期待しているようである。

それからしばらくすると、職員が一丸となって作成した動画が何編か完成し、オンライン上にアップすることができた。児童はそれを喜んで視聴していたようである。児童や保護者からはたのしく学習できたという感想が多く届いた。

この動画は、現在、本学での講義にも活用している。

【②令和２年５月号】

オンライン授業

校長　西田拓郎

新型コロナウィルス感染拡大防止のための休校が続いています。みんなが不自由な思いをして、なかなかつらいようです。そこで、私は子どもたちに少しでも喜んでもらえるようにオンライン授業を考えてみました。知り合いのアナウンサーに教科書の朗読をしてもらい、それをオンラインで流したら、子どもたちのよいお手本となり、家庭での勉強に役立つのではないかと考えたのです。そこで、早速、次のとおりのメールで依頼しました。

□□放送アナウンサー〇〇〇〇様
　無理なお願いかもしれませんが、オンライン授業で詩の朗読をしていただくわけにはいきませんか？家でつらい思いをしている子どもたちに本物の朗読を聞かせたいと思いついたのです。ご検討ください。

校長

～次頁へ続く～

～前頁の続き～

すると、しばらくして返信がありました。

校長先生
　返信が遅くなり申し訳ございません。刻々と状況が変化し、ご対応も何かと大変だと思います。お疲れさまです。そうした中、遅ればせながらご依頼の返事をさせていただきます。
　子どもたちのために私で協力できることは何でもさせていただきたいと思っています。コロナ禍でさらにその思いは強くなっています。が、わたくしよりも「日頃耳なじみのある先生や地域の方の声の方が子どもさんたちは安心するのではないか」とも思い、返事がなかなかできずにいました。ごめんなさい。コロナとの戦いはこの先も続くと思います。わたくしは著名人でもありませんし、子どもたちにとっては知らない人です。知らない人より、子どもたちは今、先生たちの声を求めていると思います。今ではなく、この先でもしも私がサポートをさせていただくことがございましたら、そのときはぜひ声を掛けてください。（中略）
　心はいつもそばにいます。これからも、子どもたちはもちろん、先生たちのサポーターになれたらと思っています。先生たちも人間です。今後も激務が続くと思いますが、どうぞ御身大切にしてください。
□□放送アナウンサー　○○○○

　私は言葉が出ませんでした。私は何か大切なことを見失っていたようです。いま子どもたちが求めているのは、素晴らしいお手本ではありません。本来は毎日通っているはずの学校の先生の生の声を求めているのでしょう。本校では慣れていないオンライン授業ですから、たどたどしいに違いありません。でも、それを届けることができたら、子どもたちは少しでも心が落ち着くに違いありません。私は知り合いのアナウンサーにそう教えられたようです。さすが名アナウンサーだと思いました。
　私は、早速、A先生と一緒にオンライン授業の制作に取りかかりました。子どもたちはどう感じてくれるでしょうか。

（3）現実から目を背けずに伝える

～令和２年６月号～

　休校中の学習課題は学年ごとに定め、定期的に回収し指導を入れていた。全校統一の課題としては毎日「俳句（あるいは一行日記）」を書くようにしていた。これについては私もすべて目を通すようにしていた。

　全員そろっての授業再開は６月になってからであった。それに先駆けて、まず５月２５日からは、午前中のみ、学級の人数を半分ずつに分けて２回同じ内容の授業を行う分散型の登校を行った。学校のすべての窓や扉は開放したままで、全員がマスクをして、三密（密閉・密集・密接）をさけた。玄関や各教室の入口には消毒液を置いた。

　さて、これまでの「学校だより」には、教育活動の成果のみを大きく伝えて、学校としてうまくいっていないことはあまり伝えないのが実情であった。隠そうとしていたのではなく、保護者や地域の不安を煽るのが嫌だったからである。しかし、初めてコロナ禍に遭遇し、混乱が避けられない状況にあっては、子供の心を象徴する現実をありのままに伝え、家庭や地域にも協力を要請するより他はなかった。

学校を全校規模で再開した６月１日に配布した「学校だより」の冒頭文が下掲の【③令和２年６月号】である。そこには、５月末に行った分散登校日から帰ってきた家庭での児童Ａの様子を載せた。後半は保護者から連絡を受けた内容である。Ａ児は学校再開を楽しみにして、休校中の生活をがんばっていたのだ。そして、やっと再開となったが、自分が思っていた以前のような学校生活ではなかったのである。私には、これがＡ児に限ったことではなく、多くの児童の心を象徴していることように感じられた。そこで現実から目を背けずに伝えることにした。無論、Ａさん及びＡさんの保護者に許可を受けて掲載したことは言うまでもない。

結果として、PTA 等の協力を得て学校と家庭の連絡を密に取ることができる体制づくりにつながった。また、放課後の消毒作業などの地域の支援体制も充実していったと感じている。

【③令和２年６月号】

（児童Ａの俳句）

かたつむりのびてちぢんでまたすすむ

校長　西田拓郎

「かたつむりのびてちぢんでまたすすむ」

３年生のAさんがこんなすてきな俳句をつくったので、その時の様子や気持ちを少しくわしく書いてきてくれるように頼んでおきました。するとAさんは、朝、校門をくぐるなり「校長先生！作文書いたよ。」とランドセルから原稿用紙を取り出して見せてくれました。「ありがとう。よく書いたね。」と私は言いました。短い文章ながらもかたつむりをよく観察して書いています。それを見ると、Aさんは長い休校中に不自由な思いをしながらも、家族の皆さんとのかかわりの中で、よい勉強をしていたのだなあと感じました。

かたつむりが公園の葉っぱにいました。ぼくが指で角をさわると、かたつむりの角はちぢみました。指を引っこめると、かたつむりの角はのびました。やがて、かたつむりはのそのそと動きはじめました。のんびり友だちに会いに行くのかな。

（Ａ）

今日は学校再開に向けての分散登校日です。Aさんもお友達や先生に会えることを楽しみにしていたようです。たった1時間ほどの再会でしたがどうだったでしょうか。

ところが、Aさんは「もう学校なんか行きたくない！」と怒って家に帰ってきたそうです。「友達とも全然しゃべることができないし、玄関も一人ずつしか入れないし、トイレのスリッパも減らされているし、･･･。」との理由。それを聞いたお母さんは、そのあと時間をかけてゆっくりと諭してくださったそうです。

再開とはいえ、今後も子どもの健康を守るために様々な制約をしていかなくてはなりません。そんな中でも、ご家庭の協力をいただきながら、人と人とのつながりを大切にしたあたたかい教育を心がけていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(4) 児童のつぶやきを伝える
～令和２年７月号～

保護者は、何よりも学校での児童の様子を知りたいと思っている。「学校だより」でも、児童の動きをよく観察して、実際の姿を伝えることを心掛けた。しかし、それはどうしても教員の目に映った児童の様子になってしまい、児童の心や気持ちをそのまま伝えられているかが疑問であった。そこで、私は児童の「つぶやき」に注目して、児童の様子を把握するようにしていた。すると、教員や他の大人がなかなか気付くことができないことに気付かされることがある。

さて、６月。全校のすべての児童と教職員がそろっての学校再開となった。みんなで顔を合わせるのは、ほぼ３か月ぶりである。しかし、再開とは２年生以上の児童に限ったことである。新入生（１年生）にとっては初めての小学校生活が始まったのだ。学級担任の先生は、まず、学校での生活の仕方を丁寧に教えていく。とりわけ、令和２年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止に配慮しての学級開きであったため、教員はひときわ丁寧な生活指導を心掛けた。何としても学校での罹患やクラスターを避けなければならないという意識であった。私も指導に立ち会い一緒に見届けることにした。すると、小学校１年生の目線から見た学校生活の驚きが見えてきたのだ。その様子の一部を伝えた「学校だより」の冒頭文が下掲の【④令和２年７月号】である。

１年生は「コロナ禍で学校生活が大きく変わった」ととらえるのではなく、「小学校の生活はこういうものなのだ」という感覚で学校生活を始める。そこに気付かされることがたくさんあった。

冒頭文に示した出来事のように、現代の多くの子供にとって、水道の蛇口とは４本の突起を握り込んで回転させ開栓するものではなかった。また、石鹸は固形ではなく液体だと思っていたのだ。

私が学校生活を送った昭和の中期までは、子供にとって学校にはあこがれのものがたくさんあった。豊富な本、グランドピアノ、テープレコーダー、ステレオなどである。その後は、うれしいことに市民生活が劇的に向上し、必ずしも学校にあこがれのものがそろっているとは限らなくなった。例えば、平成になるとほぼ各家庭にはエアコンが取り付けられるようになったが、学校には依然としてエアコンがなかった。すべての教室にエアコンが配置さるのは令和になってからである。コロナ禍への対応は喫緊の課題ではあったが、そればかりに振り回されることなく、学校の教育環境を着実に整えていきたいと思った。

【④令和２年７月号】

石鹸って液じゃないの？？？

校長　西田　拓郎

６月。やっと学校が再開となりました。でも、新型コロナウィルス感染症は収まったわけではないので、十分に気をつけなければなりません。

はじめて学校生活を送ることになった小学校１年生にも、自ら感染を防ぐ態度を身につけさせなければなりません。

まずは手洗いをしっかりとする習慣づけです。担任の先生が手洗い場の前で手の洗い方を教えています。

～次頁へ続く～

～前頁の続き～

『まず　じゃぐちを　ひらきます。てで　にぎって
　ひだりに　ゆっくりと　まわすのですよ。』
先生が、そう言いながら実演するのですが、様々なつぶやきが聞こえます。
「えっ。したに　さげるのじゃないの。」
「ちがうよ。わたしのおうちは、てをだせば　おみずがでてくるよ。」
先生は、そんなつぶやきにも的確に対応されます。
『いまは　がっこうでの　てのあらいかたを　しっかりと　おぼえるのですよ。』
「はーい。」
こどもたちは実に素直です。
　今度は、先生が網袋に入れて蛇口に下げてあるレモンの形をした石鹸をさして説明します。
『てを　みずで　あらったら　このせっけんを　てで　こすります。』
先生の説明は丁寧です。でも、こどものつぶやきは続きます。
「えっ。せっけんって　みずじゃないの？」
「ぼたんを　おしたら　でてくるのじゃないの？」
　私には当然のことなのですが、こどもにとっては不思議なことの連続なのでしょう。担任の先生は柔らかな表情をしつつも真剣です。一人一人が手の洗い方を覚えるのをきちんと見届けられていました。
　人生にはいろいろな節目があります。そのたびに環境が変わります。墨俣小学校では、どんな変化にも対応でき、みんなとたのしい生活を創造していける子に育てようと思っています。

(5) 授業の様子を伝える　～令和２年８月号～

これまでは、「学校だより」で学校の特色を伝えようとすると、どうしても学校行事の様子を紹介する内容になりがちであった。しかし、学校生活の大半は各教科の授業であることを考えるとそれは十分ではなかったかもしれない。折しも、コロナ禍にあっては、３密を避けるために、多くの人が教室に入る授業参観などはできるはずもなかった。学校再開から２か月が過ぎて、児童がどのような授業を受けているのかを知りたいという保護者や地域の願いは高まってきていた。

さて、本校では児童に実際の生活で生きて働く力を身に付けさせようと「主体的で対話的な深い学び」の授業づくりの研究に取り組んでいた。そこでは、現在のコロナ禍をどう生き抜くかという課題を児童に投げかけることを進んで行うようにした。

そんな授業の中から、６年生の授業の様子を取り上げて紹介したのが次頁に掲げる【⑤令和２年８月号】の「学校だより」の冒頭文である。「話し合いの仕方」を学ぶことが目標の国語の授業であったが、その話し合いのテーマは「コロナ禍での運動会を行うのか行わないのか」であった。活発な発言が交わされたよい授業であった。

10 月になり、感染状況が収まってきた頃合いを見て、私は運動会を決行した。この授業で話し合ったことをもとにして、６年生がリーダーシップをとり、大活躍したことは言うまでもない。みんなで三密を避け、飛沫が飛ばないように注意した。一言にいうなら冒頭文のタイトルにしたように、ソーシャルディスタンス競技＆サイレント応援団の運動会であった。来賓なしで保護者１名のみ参観の運動会ではあったが好評であった。

【⑤令和２年８月号】

６年国語・話し合いの授業「運動会をどうするか」

ソーシャルディスタンス競技 ＆ サイレント応援団

校長　西田拓郎

６年生の国語の教科書に「聞いて、考えを深めよう」という単元があります。話の内容をとらえて、自分の考えをまとめる力を付けることが学習のねらいです。その話題の例として、教科書には「学習では、シャープペンよりも鉛筆を使った方がよい」とか「学級文庫にはまんがを置いてもよい」などがあげられています。ところが、墨俣小の児童と先生が設定した話題は「コロナの感染が心配だけど、運動会は行う方がよい」でした。この話題に対して、賛成と反対の立場をはっきりさせて、具体的な理由とともに活発に意見を交換しました。なかなかおもしろい授業だと思いました。

賛成意見（Ａさん）
　私たち６年生が小学校で行う運動会は今年で最後です。だから、やりたいです。距離をあけたり、競技数を減らしたりしたらできるのではないかと思います。観戦は保護者のみとして小学校最後の運動会を行ってほしいと思います。

反対意見（Ｂさん）
　競技、応援、マーチング演技などで飛沫が飛ぶからです。暑いのでマスクもできません。三密になるとクラスター（集団感染）になってしまい大変です。手洗い消毒をすればよいですが、そこまで管理はできないと思います。

話し合いを進めていくと意見が変わる子もそうでない子もいました。結局、この授業で結論は出ませんでした。もともと、こどもたちだけで判断できる内容でもないので仕方がありません。でも、どの子も仲間の意見を聞いて自分の考えを深めることができました。私は、児童が自分たちの運動会について自分たち自身で一生懸命に考えたところが素晴らしいと思いました。

そして、その後、児童と先生がいっしょになって考えた運動会は、例年より1か月半遅れの涼しくなった頃に行う今までとは違った運動会です。その内容は、ひとことに言うなら「ソーシャルディスタンス競技＆サイレント応援団」です。ソーシャルディスタンスは難しい言葉ですが、今や学校の至る所に掲示されていて、一年生にもよくわかります。この日常を生かして、対人的距離をとった直接接触のない競技を工夫します。応援も行いますが、声は出しません。だからサイレント（静か）です。でも、応援リーダーの合図でみんなそろって手拍子をします。どんな運動会になるか楽しみです。

とは言っても、実際のところは、今後の世の中の状況次第でどうなっていくかはまだまだわかりません。修学旅行、宿泊研修、社会見学、芸術鑑賞なども同様です。児童の命を守ることは学校の使命です。同時に、児童に夢いっぱいの感動体験を味わわせることも学校の大切な役割です。皆様と相談しながら、児童にとって充実した学校生活にしたいと思っています。

(6) 児童の作品を載せる
～令和２年９月号～

年度始めの休校期間が長かったため、夏休みは８月１日から８月１６日までの２週間あまりのみとなった。児童から不満の声が上がらなかった。長い休校に比べれば、学校でみんなと会えることがむしろ楽しいと思っている現実があった。例年はたくさんあった宿題は少なくなり、自由研究や読書感想文なども必ず提出させるのではなく自由提出となった。しかし、夏休みには児童にとって重要な意義もある。例えば、自分自身の学習課題をもち、それを自由に深めたり広げたりできるという夏休みならではの学習ができるからである。

そこで、下掲の夏休み明けの「学校だより」の冒頭文【⑥令和２年９月号】には、児童の自由研究作品（１年生Ａさん）を紹介した。この自由研究は４月の休校中から夏休みにかけて継続的に行ったものである。また、研究内容を「こんちゅうかるた」づくりにつなぐなど、教科横断的な学習の様子も見て取ることもできるのである。このように、「学校だより」の冒頭文で児童の自由研究を紹介した影響は大きく、その後の自由研究の参考とする家庭が多くなった。

【⑥令和２年９月号】

興味や関心をもって学習できる子に　「昆虫すごいぜ！」

校長　西田拓郎

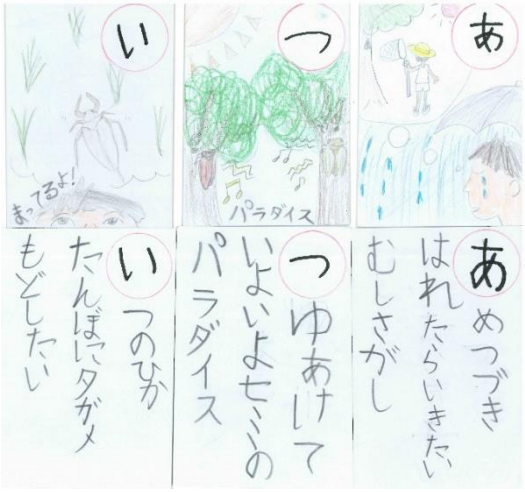
今年はとても短い夏休みでしたが、たのしく過ごすことができましたか？

皆さんが学校に提出した研究や作品を興味深く見せていただきました。どれも、その子らしさがあふれた素晴らしい作品でした。

その中から、今日は1年生のＡさんの観察記録作品「昆虫すごいぜ！」を紹介します。

Ａさんの夢は昆虫カメラマンになることだそうです。3月に買ってもらった子供用のカメラを使っての観察です。4月の休校の時から始めました。昆虫を好きになったきっかけは名和昆虫博物館で見たタガメだとか。私の幼いときには近くの田んぼでよく見かけたのですが、現在は絶滅危惧種です。Ａさんは「いつかすのまたにもタガメがもどるといいな。」と言っています。

Ａさんは、まずは昆虫をよく知るために捕まえて観察することにしました。でも、残念ながらコロナ禍のために、夏休みもどこにも行けなくて、家の周りで捕まえたり、図鑑で調べたりしました。Ａさんの作品のもう一つの特徴は研究のまとめに「こんちゅうかるた」を作ったことです。Ａさんは下の作文を書いています。漢字を覚えたり、計算ができるようになったりすることももちろん大事な勉強ですが、興味・関心のあることを見つけて、どんどん追求していく学習も魅力的ですね。



しょうがっこうにはいって、こうちょうせんせいにはいくをおしえてもらったよ。ぼくは、はいくをつくるのがすきになりました。はいくとかるたは、リズムが５・７・５でにているので、こんちゅうかるたをつくろうとしました。（いもうとにも　てつだってもらったよ）まだとちゅうです。おたのしみに！！

(7) 学校を支える地域の人の心を紹介する
～令和２年 10 月号～

学校の様子を広報するのが「学校だより」の役割だが、開かれた学校づくりのためには学校を支える地域の人の姿を保護者に伝えることも必要である。また、そこに地域のどんな願いが込められているのかを伝えることができれば、学校・家庭・地域のつながりがより深まると考えた。

さて、墨俣小学校の児童は毎日集団で登下校する。それを地域の方々が組織した交通安全見守り隊が見守る。見守り隊はほぼ地域に住む年配の方々である。平成 30 年４月に着任した私はその数の多さと充実ぶりに驚いた。他の教員に聞いても同じことを言うので、やはり墨俣小学校の見守り隊の活動は盛んであると言える。

見守り隊の皆さんと児童とは、毎日あいさつを交わしたり、歩きながらいろいろな話をしたりするので、ふれあいも多くあった。しかし、コロナ禍による長い休校期間中には見守り隊の皆さんがどうしているのか児童は知る由もなかった。実は様々なことが起きていたのである。次頁に掲げる「学校だより」の冒頭文【⑦令和２年 10 月号】では、見守り隊の皆様が、どれほどの気持ちで毎日児童を見守っていてくださっていたがわかるエピソードを紹介した。

私に寄せられる意見や感想から、児童および各家庭の地域への感謝の気持ちの深まりを感じた。

3. 実践を振り返って

令和３年度末に定年退職となった私は、後ろ髪を引かれる思いで墨俣小学校を去った。保護者や地域の代表に退職のあいさつをすると多くの方から「学校だよりを楽しみにしていた」とのお言葉を得た。うれしいことである。

・学校は夢のある場所である。
・学校は一生懸命のある場所である。
・学校は感動のある場所である。

多くの人はそのように感じていると思うが、現在の学校の「夢」「一生懸命」「感動」は何であるかはあまりわからない。「学校だより」では、それを具体的な子供の姿で示すと、多くの人に学校の素晴らしさを実感していただけるのであろう。とりわけ、冒頭文は大切である。

コロナ禍に遭遇し、それに立ち向かった最初の半年間、「学校だより」冒頭文を書くにあって、私が創意工夫したことは次の７点である。

① 目玉の対策を示す
② 葛藤も失敗も書く
③ 現実から目を背けずに伝える
④ 児童のつぶやきを伝える
⑤ 授業の様子を伝える
⑥ 児童の作品を載せる
⑦ 学校を支える地域の人の心を紹介する

令和４年度になった現在もコロナ禍は依然として続くが、これからはウイズコロナ、ポストコロナの時代を迎えるであろう。どんな時代が来ようとも、学校教育は、学校・家庭・地域が心を合わせて立ち向かっていかなければならない。やはり、「学校だより」は大きな役割を果たすはずだ。校長は学校だより冒頭文を自らの個性を生かして誠心誠意書かなくてはならないと思う。

本実践報告を今後の教育活動の参考にしていただくと同時に、校長の願いを保護者・地域・教職員に伝える「学校だより」の在り方、特に冒頭文についての検討材料にしていただければ幸いである。

（令和４年９月６日、記）

【実物⑦】　～令和２年 10 月号～

交通安全見守り隊

校長　西田拓郎

墨俣小学校の登下校はたいへん多くの人が見守ってくださっています。私がこの学校に赴任したときはその数の多さに驚きました。その中心的な役割を果たしてくださっているのが見守り隊の皆様です。Aさんも見守り隊の一員でした。

コロナ禍での休校が明けてからのこと、私はAさんの姿を見ないなあと思っていました。Aさんはご高齢ですが、長年、通学路で児童の登下校を見守ってくださっていたのです。生徒指導の先生がどうも不幸があったらしいとの情報をつかんできました。最近は家族葬が多く、しかもコロナ禍なので、そういった情報が入りにくいのです。迷いましたが生徒指導の先生と一緒にお悔やみに行きました。

「学校の先生がお参りに来てくださるとはおじいさんはとってもよろこんでいると思います。」

とおばあさんは言ってくださいました。しばらく沈黙がありました。そして、おばあさんは少しためらいつつ言われました。

「あのう、交通安全旗と安全服をいっしょに棺に入れさせていただきました。本来はお返しすべきものとは思っていたのですが、毎日一生懸命に見守り隊をやっていたので入れてあげたくなったのです。」

「そうでしたか。」

生徒指導と私は同時にそう言いました。もちろん、旗や服は自由にしていただいてよいのですが、それほどまでに思い入れをもって見守り隊をやってくださっていたのだと思うと敬服の極みでした。

「いってきます！」「ただいま！」

墨俣小学校の児童は、お陰様で今日も安全な登下校ができます。見守り隊の皆様をはじめ、地域の皆様、保護者の皆様に心から感謝致します。